正宗白鳥全集

第九卷

福武書店

正宗白鳥全集第九巻

一九八四年十月二十日　印刷
一九八四年十月三十日　發行

著者　正宗白鳥
發行者　福武哲彦
發行所　株式会社　福武書店
東京都千代田區九段南二-二-二八
〒一〇二　電話（〇三）三三〇一-二三二
振替口座（東京）六-一〇五〇九七

印刷・製本　大日本印刷株式會社
定價　六〇〇〇圓
第十四回配本（全三十巻）

（落丁・亂丁本はお取り換え致します）

©YUZÔ MASAMUNE 1984
《シリーズコード》ISBN 4-8288-2046-9
ISBN 4-8288-2133-3 C0093
NDC918 216 514p

監修　井伏鱒二
　　中村光夫
　　山本健吉
編集　紅野敏郎
　　中島河太郎
装丁　山高登

正宗白鳥全集　第九卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第九卷　小說九　目次

A、B、C　二
毒婦のやうな女　一六
淺間登山記　六六
舊い人　七四
悔恨　七七
あの時分　八三
路傍の人々　九一
惡夢　一〇〇
ある學者の妻　一三

尾花の蔭　一三九
ある日の海岸　一三五
冷　涙　一四一
老　若　二四五
幽　靈　二五九
正月三日の夜　二六六
女家主　二七四
たはむれ　二八四
大　漁　三三四

愚弄　三三九
春の夢　三三七
ある痴人の一念　三四三
幸福　三四九
移轉前　三五六
人さまく　三六五
例の如く　四〇九
監禁　四三一
開放　四三九

團菊死後　四六五
ある戀物語　四七三
父親と二人の娘　四八三
解題　中島河太郎　五〇一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小説九

A、B、C

C「この先で轢死がありましたが御覽でしたか。」
A「えゝ、ちよつと見ました。今朝沓掛近くまで散歩した歸りに偶然死骸を見せつけられたんですが、隨分ひどくやられてゐましたね。顏が潰れて人相が分らんやうになつてゐましたね。」
B「まあ恐しい。怪我に轢かれたんぢやないのでせうね。」
C「無論覺悟の自殺です。線路へ飛び込んだんですね。先日から浴衣を着た變な男があの邊をウロウロしてゐたと私のところの人夫が云つてましたよ。」
A「下駄の上へ緣のない目鏡を置いて、麥藁帽の裏に、遺書は東京へ出したとハツキリ書いてありました。筆跡も下手ぢやなかつた。」
C「夜中の二時の列車でやられたらしいんです。しかし、分らなかつたのか、分つてゐても申し出ると面倒なからか、その列車は默つて上野まで行つちやつて、明け方の貨物列車が發見して騷ぎだしたのですよ。……あなたが御覽になつた時には薦を掛けてありましたか。」
A「薦を取つて巡査が傷を檢査したやうでしたが、丈夫さうな男でした。」
C「檢査した後は警察から村役場へ引き渡したんでせうが、後始末をするにも人夫がないので、役場ぢや困つてゐましたよ。私のところへ、一人に三圓やるから人夫を貸して呉れつて頼んで來ましたが、誰れもいやがつて行きませんでした。」
B「さうでせうとも。聞いたゞけでも恐しいんですもの。その死んだ人も轢かれた時には一思ひに息が切れて、苦しみも一秒か二秒で濟んだんでせうからよかつたでせうけれど、線路の近所をウロ〳〵してゐた間は、さぞつらかつたでせうよ。丈夫な身體をもつてゐながら、何故死ぬる氣になるんでせう。」
A「死ぬる前の氣持が苦しいか悅しいか、當人でなけりや分らないだらう。……少し寒くなつた。その褞袍を取つて

呉れ。」
C「夜は急に冷えますから馴れない人は風邪を引きますよ。もう梅雨が明いたのか、よく晴れましたね。……あ、星が飛んだ。」
B「大變な星ですね。……今日の日の入りは大變綺麗でしたわね。まるで極樂の空はあんなだらうかと思はれるやうでしたよ。」
C「さうですか。高原ですから朝晩は綺麗ですよ。」
B「ぢつと見てゐると涙がこぼれるやうでしたの。私なんぞも世の中の意地の悪いこともちつとは見て來ましたから、あんな美しい日の入りなんぞ見ると一層感動するやうになつたんですね。……見惚れてゐると、これで死んでもいゝつていふ氣になるんだから不思議ですよ。」
C「情死する時の氣持はそんなものかも知れませんね。だけど、情死の死骸も見つともないですよ。私は藝者の水死を見ましたが、身體中の穴といふ穴にはみんな船蟲が入つてゐて見られた樣ぢやなかつた。淺間山の噴火口へ飛び込むのが醜態を後で見られなくつて一番いゝでせう。尤も先日投身した女學生は途中の岩に引掛つて二三日フラ〳〵してゐたさうですがね。」
B「いやなこと。モルヒネを注射するか、動脈を切るかするのが一番いゝんぢやありますまいか。」
C「さあ。……彼處に森の中に火の一つ點つてゐる家があるでせう。あの近くにあつた別荘で四年前にDといふ宣教師が殺されたんですがね。ひどい血で、二階からねと〳〵した血の氷柱が垂れてましたよ。當分はあの傍を通るのが氣味が悪くつてね。」
A「あれはたゞの泥棒で、宣教師が抵抗したから、仕方なしに殺したんでせう。左の頰を打たれれば右の頰を向けよなんて教へてゐるくせに。」
C「あの時は宣教師を悪く云ふ者もありました。日本の伊藤仁齋だか誰れだかは、追剝に會つた時に默つて衣物を脱いでやつたので、追剝の方で恐縮して、それを機會に善心に返つたといふのに、宣教師はわざ〳〵太平洋を渡つて日本人を教へに來てゐながら、物惜しみをして泥棒を一人感化することが出來なかつたのかと皮肉を云つた者もありましたよ。」
B「輕井澤は恐しいところですね。人殺しがあつたり轢死があつたりして、野中の一軒家見たいで、來た晩は寂しくつて眠れませんでしたよ。」
C「なに、今に賑やかになりますよ。……それに宣教師殺しがあつてから、警察の方で大變警戒するやうになりまし

たから。」

B「あら、蟲が一匹飛んでゐますよ。……秋になつたらこの邊では蟲がよく鳴くでせうね。」

C「えゝ。……紅葉の時分までお出でになつちやどうです？」

B「私たちは何時まで此處にゐるか分りやしません。定つた自分の家はあるやうな無いやうなものなんですから。」

A「今のやうに周圍の寂しい間の方が却つていゝんだらうな。賑やかになつて、知つた人や知らない人に訪ねて來られるやうになつちや煩いからね。それに華族や富豪がやつて來て贅澤な生活をするのを見せつけられちやお前もいやだらう。」

B「……あの汽車の通つてる邊ですかね、轢死のあつたのは。」

C「もつと先ですよ。あの先の踏切の所は土手が高くつて通り道の方から線路が見えないから危いんです。私も一度自轉車で踏み切らうとして、もすこしで汽車に打突かるところでした。どうかして土手を切り崩させなくちやなりません。」

（沈默）

B「よく晴れてること。大變な星ですわね。」

A「此處へはいろんな蟲が入つて來ますね。蟲は何處の山にも多いんだが、此處には蠅が多いのに驚く。煩くつて午睡が出來ないのに弱りますよ。手や足は蟲に刺されてこの通り脹れ上つてるんだしさ。完全な避暑地つて無いものですね。」

C「蠅も近所にまだ人がゐないから、みんな此方へ寄つて來るんでせう。……時にもう何時ごろでせう。」

A「僕とこの時計は止つてるんです。」

C「山中曆日無しですか。……私は大抵十二時頃まで碁を打つんですよ。吉田がいゝ相手なんです。」

B「あの身體のガツシリした方？」

C「あれでなか〳〵通人ですよ。唄がうまくつて。……あの男は以前鐵道の方に勤めてゐて、線路の保管か何かをやつてゐたんですが、ある時馬と人間の心中を見て、スツカリ氣を腐らせて役を止めて私のとこへ來るやうになつたんですよ。……百姓が馬を曳いて踏切へやつて來た時に、ゴーツと汽車の音が聞えて來たんです。さうすると馬が驚いて線路を汽車の方へ向いて驅け出したんですつて。百姓は馬に獅嚙みついて曳き戻さうとする。馬はます〳〵いきり立つて驅け出さうとする。汽車は直ぐ側までやつて來たから愚圖々々しちやゐられない。近所で仕事をしてゐた吉田

はそれを見ると、馬を離せ〳〵つて、一生懸命に聲を掛けたんですが、百姓は慾から馬を見殺しにするのを可哀さうに思つたのか、どうしても手綱を離さないで、汽車が目の前に見えてるのに一生懸命に馬に獅嚙みついて後へ曳張つてる。それで、馬も百姓も一緒に機關車に打突かつて、えらい酷い死方をしたんですつて。馬の肉と人間の肉と一緒こさになつて二十間も引き摺られたさうですよ。その時百姓が手綱を離したなら、却つて馬の方も助つたかも知れなかつたと、吉田は云つてゐましたがね。何しろ死に樣が酷かつたんで、吉田はそれから鐵道の仕事はスツカリ厭になつて商賣換へをする決心をしたんださうです。

A「しかし、殘酷な事を恐れてゐた日にや、何事も出來やしませんね。……あ、今のあなたの話で思ひ出したが、先日親類の者からかういふ話を聞きましたよ。親類の店へ奉公してゐる小僧の兄が二三年前からある可成り大きな驛の驛夫になつてゐたんですが、職務に忠實なのが驛長の目に留つて引き立てゝ貰へたのです。それで、役名は何といふのか、機關車と列車とを繋ぎ合せる役を去年の暮ごろから受け持たされたんです。向うから機關車が來るのを待つてゐて迅速に繋ぐんでせうが、危險な仕事でこれまでの例によると、怪我をしたり運が惡くて死んだ者もある。そこで、その男はいくら給金が上つても生命に關るやうなことをやつてゐては詰まらないと考へて、親爺に相談すると、子煩惱の親爺は、それや大變だ、そんな危險な仕事は一刻も早く止めて呉れと急き立てたので、その男も將來の立身はどうなつてもといふ氣になつて、元の地位へ下つてもいいからと驛長に役替へを願つたんです。ぢやその間どうかしようと、驛長も快く聞いて呉れたのだが、それから二三日立たん間に、その男は機關車にやられたんです。一たまりもなく死んぢやつたんで、親爺はその死骸を見ると半狂亂になつたさうですが、その男は今にこんな仕事は止めるんだと氣が弛んでゐたゝめに、その場の仕事の呼吸を間違へたのかも知れませんね。」

C「さうかも知れませんね。氣が弛むとしくじるんですね。」

B「危かしい世渡りね。」

C「や。しまつた。力一杯打つたのに蟲の奴逃げやがつた。……あなた方がお出でになる前にはこの邊にも月見草が大變に咲いてゐたんですが、苅つちやつたから花がなんにも無くなりましたね。……しかし、草の延びてる所をお歩きになる時には用心せんと蛇が出て來ますよ。」

（沈默）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com